

学会だより No. 90 2009年10月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

☆第71回哲学会大会のお知らせ

今秋は下記の要領で第71回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2009年10月18日（日） 10：00～17：00

会場：上智大学7号館14階特別会議室

★プログラム

I 研究発表 10：00～12：00

- 伊藤有紀子（本学博士前期課程）

『哲学的探究』における「想像」

- 泉 雄生（本学博士後期課程）

トマス・アクィナスの承認論——意志による超越への認識の構成——

- 石井砂母亜（本学博士後期課程）

虚無と絶対無——『西田哲学の根本問題』における滝沢の神理解——

——休憩——

II 総会 13：00～13：15

III 講演 13：20～14：20

- 荻野弘之（本学哲学科教授）

「続・英国の曲線」

IV シンポジウム 14：30～17：00

テーマ：現代の宗教哲学

提題者：八木誠一（東西宗教交流学会会長）

竹村牧男（東洋大学教授）

伊藤 益（筑波大学大学院教授）

司 会：田中 裕（本学哲学科教授）

VI 懇親会 17：30～19：30

会場：上智大学11号館7階会議室3

会費：3,000円

☆シンポジウム：現代の宗教哲学

★提題要旨

いま・なぜ宗教哲学なのか

八木 誠一（東西宗教交流学会会長）

二十世紀中葉から国際的規模で仏教と基督教との対話がなされた。対話が目指したことは、まず相互理解であり、次に対話を媒介として自分の伝統に含まれながらもいはば眠っていたものを目覚まし展開することであり、さらに異なった宗教同士が共存ないし協力する理論的根拠と実際的方法を見出すことであった。

しかし問題の中心は、異なったふたつの宗教には共通の根底があるのではないか、という点にあると思う。ただしこの方向への探求には多くの問題が横たわっている。まず基督教は使徒の証言を伝える新約聖書に基づくものであり、使徒はイエス・キリストの死と復活の事実と意味を証言する。これはいわゆる「歴史的啓示」であって、人間一般も可能な体験や思惟によって到達できることではないとされる。ここに基督教の絶対性が主張される根拠がある。実際、宗教間対話には基督教の絶対性を突破して共通の地盤を求める方向があった。他方、二十世紀の新約聖書学は多くの重大な問題を提起してきた。それは「史的イエスの問題」であり、「非神話化の問題」であった。前者は「歴史のイエス」と「宣教のキリスト」の問題を問い、後者は客観的な出来事として語られるキリストの宣教から、その実存論的意味を読み取ろうとする。両者は要するに、新約聖書の記述への歴史批判を媒介としてキリスト宣教を宗教的自覚の表現として読むことである。それはいかにして可能なのか。仏教と基督教の対話を媒介として、それぞれの宗教を、その中心にある宗教的経験と自覚の表現として理解するとき、そこで要請されるのは体験・自覚・言語化の一般論であり、そこからしてまずはテキストを解釈することである。それについては経験と自覚の表現であるテキストの解釈学と、宗教的生を成り立たせる場の構造論が構想される。両者は現代の宗教哲学といえるであろうし、それは対話を推進する地平を開くことにもなるだろう。

*

多元化社会の中の宗教哲学——仏教から西田哲学へ——

竹村 牧男（東洋大学教授）

今日、地球社会の多元化が進みつつあり、その中で「共生」がさまざまな局面・地平において課題となっている。このような状況の中で、宗教のあり方も切実に問われている

るが、ジョン・ヒックは宗教多元主義を主張したのであった。そこでは、唯一の神的実在というものが想定されており、それはカントの物自体のように、人間の経験をまったく超越したものと考えられている。しかし仏教は、覚りという直接体験を重んじていて、ヒックの宗教多元主義の構想に、仏教の教理は相容れないことになる。

仏教の一つの特徴として、真理の階層性を認めるということがある。それは、認識能力の違いに応じて見えてくる地平は異なるのであり、唯一の真理があるわけではないとするものである。その一つに、たとえば、空海の十住心思想がある。それは単に心の見方の深まりを示すのみでなく、それらが各学派・宗派の思想とも対応していると主張するが、その究極（密教）は、実は自己の心に、あらゆる他者が生きているというものである。この空海の実験的思想は、多元主義に限りなく近い包括主義ということになるだろうか。

一方、西田は、最晩年に宗教の事を論じている。そこでは、絶対者が自らを絶対否定して相対（個物的多）に翻るという論理において、自己の成立が語られている。そこでは、自己は自己を超えるものにおいて自己を持つことになり、その超個と個との矛盾的自己同一には、「逆対応」のダイナミズムがあるというのである。このとき、当然、個は個に対して個であり、他の個と絶対の否定を介して相互に限定し合う中で、歴史の創造へと働いていくことになる。実はそこに、西田のいう「平常底」があるであろう。

このような、絶対者の自己否定が明瞭に論理化・自覚されることにおいて、多個の中での、真実の主体としての自己が成立しうることになる。この立場であってこそ、自己の成立の真実にふれつつ他をどこまでも尊重する立場が開かれるのであり、多元化社会にふさわしい宗教哲学であると言えるように思うのである。

*

往相還相二種回向と田辺元——宗教哲学としての田辺哲学の一側面——

伊藤 益（筑波大学大学院教授）

親鸞において、往相廻向とは、弥陀の本願力に与る者が弥陀の導きのもとに浄土へと往生を遂げることをいう。他方、還相廻向とは、浄土へと往生した者が弥陀の大慈悲心を全身に帯びつつ現生へと再帰して、いまだ弥陀の本願力に与っていない衆生を浄土に向けて救い出すことにほかならない。主著『教行信証』が教巻冒頭部にそれを掲げている点、「親鸞」という法名が世親と曇鸞を強く意識するものである点から見て、往還二種回向が親鸞思想の核をなすものであることは疑いえない。ところが、もし親鸞のいう往相廻向が臨終時に定まるとすれば、還相廻向は死者の現生への回帰を表わすものとなり、その非現実性が際立つ。親鸞の高弟唯円の書『歎異抄』によれば、親鸞は臨終往生

説に立っていたという。これに対して、親鸞晩年の書簡を収集した『末燈鈔』や、晩年の和文による著作『一念多念文意』などは、親鸞は生きながらにしての往生、すなわち即得往生を主張したとしている。即得往生説によれば、還相廻向は現生に在る者の他者への慈しみを意味することになり、親鸞の思想は非現実性を免れることになる。しかし、『歎異抄』が書かれた時期と後二書が書かれた時期とがほぼ同時期である事実は、往還二種回向をめぐる親鸞の思想が大きな矛盾をきたすことを意味する。この矛盾を解決するにはいかにすればよいのか。文献検証に基づくかぎり、それは解きえない矛盾であるといわざるをえない。

この矛盾を解決するための示唆を与えるものが、田辺元が『懺悔道としての哲学』以下一連の後期宗教哲学的著作において披瀝する「往相即還相、還相即往相」という考え方である。本提題では、田辺のこうした考え方が親鸞解釈に新たな視点をもたらすことを明らかにするとともに、それが懺悔道的段階からキリスト教的段階を経て菩薩道的段階に至って完成される、田辺の宗教哲学の核心を説き明かす鍵概念となりうることを闡明したい。

☆講演要旨

「続・英国の曲線」

荻野 弘之（本学哲学科教授）

本年九月まで一年間、在外研究で英国に行っていましたので、その見聞の一部をご報告いたします。深遠かつ難解なてつがく講演ではなく、懇親会前の漫談とお考え下さい。

目次（当日予告なしに変更あり）

- ・ローマ街道を往く——牛も渡るテムズ河畔の尼僧院
- ・できちゃった大学／つくった大学
- ・コレジの壁の穴——ガウンとタウン
- ・不思議の国のアリスとテレス——『形而上学』をどう読むか？
- ・図書館という迷宮——壮麗にして暗鬱なる「宝島」
- ・アングロ・カトリシズムの憂愁——University Sermons
- ・Oxford English (?) と「国際化」の波

純粹に学術的な話題に関心のある向きは、新刊の拙著『書物誕生・マルクス・アウレリウス『自省録』——精神の城塞』（岩波書店）をご覧ください。留学を計画中の学部生も来聴歓迎、ただし参考にはならないでしょう。

☆研究発表要旨

『哲学的探究』における「想像」

伊藤 有紀子（本学博士前期課程）

ウィトゲンシュタインは『哲学的探究』（以下『探求』と略す）のなかで繰り返し、我々が使っている言葉の意味は、個人の心の中で起こっていることに基づいているという考えを否定している。だが、心の中の出来事が否定されているのではない。それゆえ、個人の心の中について語る我々の日常の言葉遣いは、どのようなものなのかを示す必要が出てくる。『探求』での「想像」に関連する諸節は、このような文脈の中に位置づけることが出来る。それらの節では、想像内容や想像することが、語の意味と対応したり、語に意味を持たせたりすることが否定されているだけではない。「確かに痛みの想像は、ある意味でこの言語ゲームに入り込む、ただし、像としてではなしに」（300 節）や「我々の探求に於いて、想像可能性は如何なる役割を演じるのか—即ち、想像可能性は命題の意味をどのくらい確定するのか—という事については、不明確である」（395 節）とあるように、我々の行う言語活動と「想像」、語の意味に関する探究と「想像可能性」との複雑な関係が指摘されている。では、我々の行う言語活動において「想像」はどのような役割を果すのだろうか。

今回の発表では、『探求』300 節を解釈することで、この問いに答えていきたい。この節を理解するには、感覚について語る言葉・実際に感じている感覚・感覚の印象 の3つを区別する必要があると思われる。それゆえ、これら3つがそれぞれどのようなものとして考えられているのか、さらに「想像」はこれらとどのように関わることを中心として考察を進めていく。最終的には、「想像」は直接的な感覚やその感覚が我々に与える印象とは異なり、極めて言語的な活動であるということ、つまり個人的な感じ、感覚から距離をとり、その個人的な何かが我々の生活の中で果す役割を考えることに関わるということを示したい。

*

トマス・アキナスの承認論——意志による超越への認識の構成——

泉 雄生（本学博士後期課程）

本発表では、「信じる」という人間の宗教的行為で主要な役割を果たす「承認」(assensus)について考察する。信仰者は一般に、信仰命題を正しいものとして承認している。その意味で、宗教的信仰は、真理を固有の対象とする知性的行為である。しかし、そもそも信仰者は、何を根拠に信仰命題を正しいものとして承認しているのか。あるいは、信仰の承認は、「思い込み」といったある種盲目的で恣意的な行為と明確に区別できるのか。あるいは、そもそも信仰の承認は、信仰者にとってどのような意味があるのか。本発表では、こうした問題をトマスの信仰論に基づいて論じていく。

信仰の承認は、知性の行為として厳密に規定されるが、そこでは意志もまた重要な役割を果たす。すなわち、信仰の承認に際し、意志は知性に対して信仰命題を承認するように命じる。そして、知性はこうした意志の命令に基づいて信仰命題を承認する。それゆえ、信仰の承認がもつ構造は、意志そのものと、知性と意志との関係をそれぞれ分析することによって明らかになる。また、信仰の確実性についても、同様の分析を通して明らかになる。

さて、信仰の承認によってわれわれは、信仰命題を通して、究極目的としての神を知性において受容する。それゆえ、信仰の承認において、意志が重要な役割を果たすことを考慮すれば、信仰の承認とはまさに、意志によって神という超越に関する認識を構成することを意味する。そして、この信仰による神認識を通して、信仰者は究極目的としての神を目指すことになる。究極目的としての神への到達は、人間の完全な幸福を意味すると同時に、永遠の生命という福音的な救済を意味する。それゆえ、信仰の承認とは、人間の完全な幸福や宗教的救済の発端として意義づけられる。

*

虚無と絶対無——『西田哲学の根本問題』における滝沢の神理解——

石井 砂母亜（本学博士後期課程）

滝沢克己を語るということは、滝沢が西田哲学と共にした対話の場を拓くことでもある。それは一つに、滝沢の思想が西田哲学との対話において構築されたという事実にある。滝沢が西田哲学との出会いを通して哲学する者となり、西田の助言によりカール・バルトのもとで弁証法神学を学んだことはあまりにも有名である。ドイツから帰国した滝沢は書簡や論文を通して西田と交流し、西田の死後は晩年に至るまで西田哲学とバルト神学との対話の場となった。しかし対話ということでもう一つ忘れてはならないのは、

後年滝沢がキリスト教と仏教の対話に力をいれ、宗教間対話の場を拓いたということである。滝沢は西田哲学との対話を通して自らの思索を深め、それは結果として宗教間対話に代表される新たなる対話を拓いた。滝沢に哲学との出会いを拓き、キリスト教との対話を拓いたのは西田哲学である。滝沢は 1960 年代から最晩年に至るまで、久松真一、阿部正雄、秋月龍珉、八木誠一らと最前線で宗教間対話を行ったが、この対話の場そのものを拓いたのも西田哲学である。

本発表ではこのような滝沢と西田哲学との対話を踏まえた上で、滝沢の完結した西田論『西田哲学の根本問題』（1936 年）における滝沢の神理解を扱いたい。本書は滝沢がバルトに出会い親炙した後に記されたものである。若き滝沢はドイツから帰国するや否や自らの問題として西田哲学とバルト神学との対話に従事し、西田哲学の根本問題を扱った。西田の「即」をもって結ばれる諸概念を「非連続の連続」から解きおこし、神学用語を用いながら神人関係に定位して語ったのが本書である。滝沢の神理解は西田哲学の根本問題を扱う上で開陳されるが、そこには西田哲学からは出てこない独自の理解が見られる。本発表ではこの相違に注目して、滝沢と西田哲学との対話の一端を拓いてゆきたい。